

千葉組主催「親鸞教室」



5月23日（木）松戸市西蓮寺様向拜にて

光といのち

第148号

— お盆 —

2024年8月1日発行
発行所

真宗大谷派勝善寺

〒299-2214

千葉県南房総市二部1344

電話 0470-57-2657

FAX 0470-57-2290

メール info@syozenji.or.jp

HP <http://syozenji.or.jp/>

住職 釋孝昌（井上孝昌）

いまが一番いい時
いまが一番いい所
ここが一番大事な所

暑中お見舞い

申しあげます。

「親鸞教室」の会場に自家用車二台に分乗して赴きました。自宅から直行された方、ズーム参加された方もありました。

「親鸞教室」は、千葉県内真宗大谷派寺院二十二ヶ寺による共同教化事業です。親鸞聖人の歩んだ道を私たちも歩もうと、法話を聴聞し語り合う集いです。

この四年間、新型コロナウイルス感染症罹患を怖れてズーム配信で続けていました。今回は、久々の会場開催。講師の法話を会場に集まり仲間と一緒に聴聞する。この当たり前だったことが、なんと懐かしく嬉しい。

一方、事情があつて会場に行けない方が、オンラインで仏教を聴聞できるようになった。いずれも新型コロナウイルスのおかげです。さて、題字下は、かつて池田勇諦先生からいただいた言葉です。先生は「これが浄土に出遇った事実でありましょう」と言い添えられました。どういう意味なのでしようか。その文章を見開きページに掲載しましたのでよく読んでください。ところで皆さん、「浄土」を、

どのようにイメージされていますか。私は、親鸞聖人の説く「浄土」を先生に教えられ、驚愕（きょうわく）（きょうがく）しました。仏教を聴聞していると、その時のように、思い込みに囚われている自分に気づかされ、ハッとすることがよくあります。そして、若い頃のように試行錯誤の人生がまた始まる。

房総は、高齢化社会真っ只中。住職は喜寿、坊守も高齢者になりました。写真の皆さんの大半は後期高齢者、最高齢は八十六歳。「月曜朝のお勤め」に一番早く来る方は卒寿、ズームで仏教を聴聞する九十五歳の方もおられます。みんな仏法を聴聞し、トライアンドエラーしている。挑戦する元気のある「年齢を重ねた若者」です。

このように、私も成りたい。そして若い人たちからは、そのように思われたい。

盂蘭盆会

八月十日（土）

十時～十一時半

ズームで配信しますので、メールでお申し込みください。

浄土

「浄土」は、死んでから往く世界と思っていました。それは「天国」だと言う人が最近が多いですが、それはキリスト教徒にとつてのことです。日本では昔から「あの世」「草葉の陰」「冥土」と言っていました。しかし浄土真宗に縁のある皆さんには、「浄土」とか「彼岸」と言っています。

「そんなことはどうでもよい。そもそもそんな世界があるのか？死んだら無になる」とのたまう方もいらつしやる。「それではなんだか寂しいねえ」と前坊守は言っていました。

**「浄土が私たちの国土になってく
ださる、居場所になってくださった」**
と池田勇諦先生のお話しを聞き、びつくり仰天。浄土真宗をしつかり勉強しなければと促されました。二〇〇八年二月二十九日の僧侶を対象にした「聖典学習会『教行信証』に学ぶ」でのことでした。

もしこの「浄土」を知らなかったら、私の人生は羅針盤の無い航海、どこに居るかも分からず成り行きに任せに彷徨い、不安と虚しさに苛まれていたことでしょうか。

私にとっては大変忘れがたいご縁なのですが、石川県の山代温泉に「永楽荘べにや」という温泉旅館がございます。今の社長さんは三代目です。初代は私の年代からは、親の世代の人なのです。その人が、近くの農家から山代温泉へ出てきて湯治宿を始められた、というのが事の起りなのです。そして、跡を継がれた息子さんが、私より三つ四つ年上だったと思いますけど、六十代で亡くなられ、今はその息子さんが社長をやっておられると思います。その初代のご夫婦が、加賀の人ですから浄土真宗に非常にご縁があつて仏法を大切にされる人で聞法者だったのです。そういう家庭に育った息子さんですから、その息子さんも聞法して仏法に深いご縁をもたれた。山代温泉のご真ん中に、亡くなった出雲路暁寂先生の大谷派の大きなお寺がありますが、出雲路先生とも出会わ

れて、仏法のご縁を深められたようです。その「べにや」さんのお住まいを私が訪ねましたとき、玄関に掛けてあつた色紙に書いてあつた言葉がとても印象に残っているのです。「いまが一番いい時、いまが一番大事な時」と。私ははっとしました。皆さんいかがですか。この「いま」です。私たちはこの「いま」が抜け落ちていくのです。**国土喪失**ということ、そのことじゃないですか。我々が言っている今は、今さえよければいい、後は野となれ山となれの刹那的な今でしょう。過去からも切り離し未来とも切れた単なる刹那的な今しか我々は知りません。だから虚しいわけでしょう。ところがこれは違います。過去をおさめ、未来を孕んだ真実の「いま」です。これは、有り難いというよりも厳しい言葉ですね。この言葉は都合のよいことにあつた時はいいのですが、都合の

悪いことにあつた時に、「いまが一番いい時」と。どうですか、そういう問題です。本当の「いま」というのはそこなのです。健康な時も「いま」、病気になつた時も「いま」、災難に遭つた時も「いま」ですから、「いまが一番いい時、いまが一番大事な時」といえる智慧です。それが**浄土が私たちの国土になってくださる、居場所になってくださった**ということじゃないですか。これは**第十三願の寿命無量の意味**があらわれていまけれど、同時に**第十二願意も**加えさせていただきますと、「ここが一番いい所、ここが一番大事な所」となりますね。時間と空間があらわされる。**「いまが一番いい時、いまが一番大事な時。ここが一番いい所、ここが一番大事な所」**。これが浄土に出遇つた事実でありましょう。

◎「※」は次ページを参照してください。赤字は住職が施す。

『教行信証』に学ぶ(一)より

本願酬報の国土

浄土というのは経典を見ると安養とか安楽とか極楽とか色々な言葉がありますが、親鸞聖人の『教行信証』においては「報土」という言葉、これが基本語です。「真仏土巻」の最初の言葉です。「大悲の誓願に酬報するがゆえに、其の報仏土と曰うなり」（『真宗聖典』三〇〇頁）と。誓願、本願に酬報する土。本願に酬報するということは『浄土論』『浄土論註』にかえせば本願の荘嚴です。本願は形がない。無相である。形を超えている。形



池田勇諦先生

を超えた本願が形をとった。それが荘嚴、つまり報土です。だから、浄土というのは願心の形です。本願の心を表現している。願心荘嚴の浄土であります。

今日の私たちは**国土喪失**の生き方でないか。この頃、居場所という言葉がよく使われます。居場所がないとか、居場所を見つけないとかいいます。今日の私たちの国土喪失という生き様の問題に伝えてくださる願心は、国土を失っている私たちの国土となろう、居場所を失って生きている私たちの居場所となろうという願心です。それが本願荘嚴です。どこまでも私たちの国土となろうという本願を、形をもってあらわしたのが浄土でしょう。だから浄土は三種二十九種の荘嚴という、すがた、かたちであらわされているわけですが、それはまさに私たちの国土となったださり居場所になったださる本願そのものはた

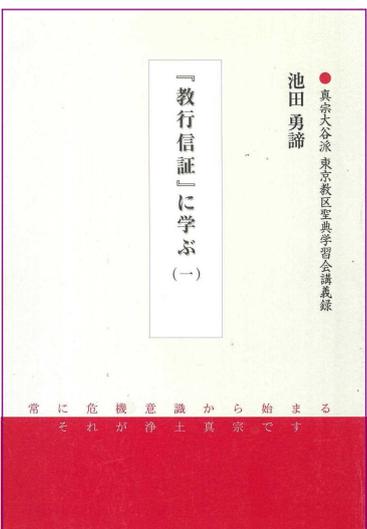
らきにほかならない。それゆえ題号へ帰せば真実の教行証、行信という問題になる所以です。

ところでこの場合、本願は何れの**本願か**というと、**第十二願**、**第十三願**ですね。「光明無量の願」と「寿命無量の願」です。「真仏土巻」にはこの二願が標擧されています。十二願の光明無量といふことは限り無き智慧です。十三願は限り無き慈悲です。光明のはたらきは空間、寿命のはたらきは時間であらわされる。光明は十方、寿命は三世という視点で見られる所以です。限り無き空間、限り無き時間の本願が限りなく私たちの国土となろうという、その国土はどんな中身かといえ、限り無き空間といふことは「どこでも」ということ、限り無き時間ということ、は「いつでも」ということ。どこでも」といふかぎり、それは必ず「ここ」です。「ここ」に極ま

ります。「ここ」が抜ければどこでも」は言えません。「いつでも」は「いま」に極まる。「いま」が抜ければ「いつでも」とは言えません。ならば、国土を失って生きている私とは、本当の「ここ」、本当の「いま」を見失って生きているということでありましょう。「いま、ここ」が無いのです。あんなったら言うことな

いとか、ああすればよかつたとか、私たちはそんなことばっかりの生き方ですね。そういう私たちに、本当の「ここ」、本当の「いま」となりましようというのが本願酬報の国土、本当の居場所となつてはたらいてくださる。

『教行信証』に学ぶ(一)より



勝善寺奉仕作業
6月9日(日)

私たちの寺



世話人と有志、みんなで45人。草刈りとガラス拭きなどで汗を流しました。お疲れさまでした。ご夫婦や親子3人での参加もありました。

富澤 眞知子	黒川 敦子	重田 明美	大胡 真紀子	五列目	中川 煌子	堀海 榮子	伊藤 照代	姫松 信子	四列目	西尾 和恭	三堀 清	能重 勉	川名三枝子	鈴木正一郎	三列目	川名 喜昭	朝倉 和利	井上 泰之	二列目	富永 清人	重田 和夫	田中 嘉一	田村 晋一	久保田 守	吉田 誠	高梨 維夫	前列右から(敬称略)
井上 孝昌		中川 弥生	井上 悦子		石井 久	渡邊 秀子	北村 洋子	大胡登美子		田中 誠	狩野 昌也	田中 仁子	池田 義正	明石 義久	高梨 剛	川名 信之	川名 利幸	川名 利幸	中山 郁夫	大胡 幸弘	足達 崇	臈居 政男	田中 昭一	福原 広実	中川 正博		

本堂周囲の濡れ縁を「浜縁(はまえん)」と言います。本堂前の龍など彫刻の欄間がある庇の下を「向拝(ごはい)」と言います。浜縁と欄干(らんかん)と向拝階段を、狩野工務店の狩野昌也さんと明石圭司さんに削ってもらいました。こんなに綺麗になるとは思いませんでした。これでストッキングが破れたり土足で上がる人はいないでしょう。

手間のかかる面倒な仕事ですが、お一人とも世話人、少しでも良く仕上げたいと根気強く削ってくださいました。有り難うございました。今後、傷んだ部分の補修や塗装をします。



1ヶ月ぐだわら

孟蘭盆会	8月10日10時
秋彼岸会	9月22日10時
役員会	10月6日13時30分
仏教を聞き語り合う会	10月13日13時30分
世話人総会	10月20日13時30分
仏具磨き	11月11日13時30分
報恩講準備	11月15日13時30分
速夜	15時
晨朝	16日6時
日中	16日10時
勝善寺聞法会	12月15日13時30分
除夜の鐘	12月31日23時45分
修正会	1月2日10時
八日講十日講	1月8日9時
仏教を聞き語り合う会	2月9日13時30分
春彼岸会	3月20日10時
花まつり	4月6日13時30分
仏教を聞き語り合う会	5月11日13時30分
中佐久間講	5月20日13時30分
八日講十日講	6月1日9時
奉仕作業	6月8日8時30分
勝善寺聞法会	6月8日13時30分